

美しい肖像画

—Oscar Wilde の 1891 年における審美主義—

森 彩香

19 世紀末の芸術家 Oscar Wilde にとって、審美主義とは何であったのだろうか。Wilde は、芸術を通して美を追求した。しかし、Wilde が美を説明する箇所は作品にも評論にも殆ど無い、それに比べて個性を具体的に説明する箇所は評論に多い。1891 年版の *The Picture of Dorian Gray* で語られる美しい肖像画を手がかりに、1891 年に出版された *Intensions* や *The Soul of the Man Under the Socialism* と重ね合わせながら論じる。また、Wilde は、*The Picture of Dorian Gray* の序章を次の文章で始めた“The artist is the creator of beautiful things. To reveal art and conceal the artist is art’s aim” (Wilde 3).小説が始まる前に、批評家としての Wilde が顔を覗かせる書き出しで始まっている。つまり、芸術家である Wilde の作品に対する、批評家である彼の弁明である。美しいものを作るのが芸術家であり、その結果生み出される芸術は、“re-veal”である。この単語は、*OED* によれば、再び覆いを取り外すことである。その後で、芸術を生み出した芸術家はすっかり隠されることを芸術の意図とするのである。覆いをはがされた芸術が最も美しいとすることで、芸術が主体となり至上のものとなり、芸術家を超越している。Wilde の 1891 年における美への探求について考察する。

美しい肖像画

Wilde の美への言及は意外に少ない。その Wilde が作品の第一声で美を取り上げたのが、1891 年度版の *The Picture of Dorian Gray* である。この作品の序章の出だしで述べていることの要点は、美しいものを作る芸術家が生み出した美しいものが芸術であることだ。美しいものを追い求めるということについて、*Intensions* に収録されている“The Critic as Artist”で Gilbert は次のように語る。

To discern the beauty of a thing is the finest point to which we can arrive. Even a colour-sense is more important, in the development of the individual, than a sense of right and wrong. Aesthetic, in fact, are to ethics in the sphere of conscious civilization, what, in the sphere of the external world, sexual is to natural selection. Ethics, like natural selection, make existence possible. Aesthetic, like sexual section, make life lovely and wonderful, fill it with new forms, and give it progress, and variety and wonderful, and give it progress, and variety and change. (Wilde 1015)

Gilbert の説明によれば、美しいものの存在を認めることがもっとも素晴らしいことなのである。この、善悪を超越した審美主義とは、人生を愛しく驚くべきものにする、変化に富んだ思想であるのだ。Gilbert が考える、美に気づくために必要なことは、審美主義の姿勢を取ることである。そして、審議主義の態度を取ることでもたらされる効果について次のように説明する。

...we attain to that perfection of which the saints have dreamed, the perfection of those to whom sin is impossible, not because they make the renunciations of the ascetic, but because they can do everything they wish without hurt to the soul, and can wish for nothing that can do the soul harm... (Wilde 1015)

審美主義的であることは、聖者が夢見ていた完璧さを実現することである。それは、罪に穢れていないことである。審美主義は、罪が存在しない完全さを持ち合わせているので、魂を傷つけることなしに、何でもすることが出来るのである。

Gilbert が説明しているのは、Wilde の作品に表れる審美主義である。Wilde の考えとは別に、審美主義の哲学的な認識について Townsend は次のように述べる。

Philosophers did not begin to use the word ‘aesthetics’ until the eighteen century. Then, it began to appear as a term to describe the whole area of feeling, as opposed to reason. A conflict between feeling or emotion and reason is one of the oldest problems in philosophy.
(Townsend 1)

審美主義とは、理性に制御されない感覚や感情のことを意味しているといえる。また、哲学的に 18 世紀まで審美主義という言葉自体が使われておらず、それ以後徐々に理性に相対するものとして使われている。この理性を Wilde が説明しているのが、1890 年に *St James's Gazette* の編集者に向けて宛てた手紙である。

Good people, belonging as they do to the normal, and so, commonplace, type, are artistically uninteresting. Bad people are, from the point of view of art, fascinating studies. They represent colour, variety and strangeness. Good people exasperate one's reason; bad people stir one's imagination. (Hart-Davis 259)

Wilde が語る、理性を持っているということは、典型的かつ模範的な良き人であることだ。それに対して、挙げられているのが、悪い人である。悪い人は、芸術的にみて魅力的だと述べている。そして、それは理性に対する想像力のことであり、現実の制約に抑制されない想像力を覚醒することである。

Wilde が執筆した、道徳を超越した想像の物語が、1891 年に *The Picture of Dorian Gray* という題名で改訂出版された。道徳が主体となった物語でないのは、批評家としての Wilde が序章で、“There is no such thing as a moral or an immoral book. Books are well written, or badly written. That is all” (Wilde 3).と否定している所から読み取ることが出来る。また、この作品は 1890 年に出版されたが、1890 年の *Daily Chronicle* では道徳が強調された。“It is a tale spawned from the leprous literature of the French Decadents – a poisonous book, the atmosphere of which is heavy with the mephitic odours of moral and spiritual putrefaction...” (Beckson 72).この書評に対して、Wilde は手紙で *Daily Chronicle* の編集者に道徳について次のように述べている。“I think the moral too apparent. When the book is published in a volume I hope to correct this defect” (Wilde 263).つまり、1891 年の *The Picture of Dorian Gray* では、道徳観点とは違う視線を置いていることになる。

想像の物語と言ったときの Wilde にとっての想像だが、この想像について語られているのが 1889 年に発表した *The Portrait of Mr. W. H.* の第一章の主人公の回想場面である。“...an attempt to realize one’s own personality on some imaginative plane out of reach of the trammeling accidents and limitations of real life...” (Wilde 221).ここでは、想像の世界において、自己の特性に気づくことの大切さを語っている。想像とは、現実の煩わしさや制約の届かない場所で自身の個性を実現することである。

美しくあり続ける肖像画に代表されるような、時の無い美しい世界を称えることは、Wilde の時代において特に新しい主題ではない。例えば、時の無い美しい想像の世界を垣間見ることが出来るのが、Keats の“Ode on a Grecian Urn”である。

Thou still unravish’d bride of quietness,
 Thou foster-child of silence and slow time,
 Sylvan historian, who canst thus express
 A flowery tale more sweetly than our rhyme
 What leaf-fring’d legend haunts about thy shape
 Of deities or mortals, or of both....

(Keats 153)

ギリシャの古がめを見ながら、それを時に穢されることの無い花嫁に見立てている。この古がめは静寂と共に存在してきた。つまり、時の無い世界に存在しているからこそ伝えることの出来る物語も、永遠で朽ちることが無いゆえにさらに美しく、我々が知る事の無い神々の世界を教えてくれるのである。

The Picture of Dorian Gray の Dorian の美しい肖像画も同じ事が言える。主人公の Dorian を Lord Henry が、“...this young Adonis, who looks as if he was made out of ivory and rose-leaves” (Wilde 6).と表現する。友人の画家 Basil による、Dorian を描いた美しい肖像画に Dorian は夢中になってしまう。肖像画が自分自身より美しいと考える Dorian の理由は次のようなものである。“Youth is the only thing worth having. When I find that I am growing old, I shall kill myself” (Wilde 22).若さに代表される美こそが、Dorian が憧れたものである。“I am jealous of everything whose beauty does not die. I am jealous of the portrait you have painted of me” (Wilde 22).つまり、肖像画は変化しないから、美しくあり続けるのである。そして、Dorian が嫉妬をしたのはこの点にある。

しかし、Dorian の肖像画に象徴されるような、時が存在しない美は、変化しないからこそ美しいのである。*The Picture of Dorian Gray* で描かれる Dorian は、時を持つ人間の運命である。ギリシャの古がめや、Basil が描いた肖像画のような、見た目に美しいものは、変化をしない。しかし、Dorian は Lord Henry の思想の影響を受けている。Dorian は影響を受けていることをはっきりと述べる。“That is one of your [Lord Henry] aphorisms. I am putting it into practice, as I do everything that you say” (Wilde 35).そして、Dorian が影響を受けている思想は、肖像画の美しさに関して言えば、次のようなものである。Lord Henry は美しさを“To me, beauty is the wonder of wonders. It is only shallow people who do not judge by appearance.” (Wilde 19).と説明する。Lord Henry が考える、美しさを奪おうとするものは、時間なのである。“Time is jealous of you [Dorian]...” (Wilde 19).美しい肖像画の生き写しのような Dorian は、時間に嫉妬されているから、

若いうちが花だと教える。“Be always searching for new sensations. Be afraid of nothing...A new Hedonism – that is what our century wants. You might be its visible symbol...Youth! Youth! There is absolutely nothing in the world but youth!” (Wilde 19).美しさが頂点に達している時に、新しい感覚を求めて経験をし、より完全なものにすることが Lord Henry の目指す所であり Dorian の目標でもある。

しかし、Dorian にとって、経験とはからなずしも美しさに花を添えるものではなかった。Dorian が新しい感覚を求めて誘惑した Sybil が自殺をしてしまった後、肖像画の変化に気付く。“...there was a picture before him, with the touch of cruelty in the mouth” (Wilde 65).最高の美を求めれば求めるほど、肉体は時の世界へ置き去りになる。彼が自分を、より完全なる美へと近づけようとすればするほど、どんどん肉体は地上に置いてきぼりになる。完全に切り捨てようとしても、切り離すことは出来ない。何故なら、Dorian は Lord Henry が勧めた人生の経験を通して時を表現している存在であるからだ。もし、この時間の観念から解き放たれようとする、快楽の経験をすることは出来ない。時を止めることは、若さも、情熱も、得たいものも、最高の形で残すことが出来るが、決してその枠から出ることも、変化をすることも無い。永遠に手にして、永遠にそれ以上を見ることが出来ないのである。The Picture of Dorian Gray の結末はこの事実をもっともよく表している。

When they entered, they found hanging upon the wall a splendid portrait of their master as they had last seen him, in all the wonder of his exquisite youth and beauty. Lying on the floor was a dead man, in evening dress, with a knife in his heart. He was withered, wrinkled, and loathsome of visage. (Wilde 154)

完全な美とは永遠なる美で、時は必要がない。時を止めた結果、Dorian は時のない世界を生きる死者となり、絵は元にいた場所である、永遠に時のない絵画の世界へ戻る。Dorian にとって肖像画は、道徳の化身を象徴するかどうかといった道徳心以上に、自身の時間の変化を止めてもらう上で絶対に必要なものなのである。

完全で永遠なる美を手に入れることが出来るのに、快楽を得たいという欲望が経験をさせる。より新しい美しさを求めたい、喜びを得たい、つまり、経験をしようとする、経験は時の経過によってもたらされるものである、経験をしたら当人は変化してしまう。常に完全でいられる美ではなくなってしまうのである。完全な空想の世界から、現実に引き戻された時に、より新たな感覚を得て完成されたものになりたいという欲望に支配されてしまう。完全な美以上の完全さを求めようとすればするほど、欲望の支配から逃れられない、美を追求する審美主義の態度もそれに近い。Wilde にとって、Dorian の美しい肖像画に代表されるような、美の想像を掻き立てる欲望に支配された世界は、退廃的だが、欲望に支配されてしまう人間の生々しさを表現する、興味深い主題の切り口であった。

参考文献

- Beckson, Karl. ed. *Oscar Wilde: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1970.
 Ellmann, Richard. *The Artist as Critic*. NY: Random House, 1969.

- . *Oscar Wilde*. London: Hamish Hamilton, 1987.
- Hart-Davis, Rupert. ed. *The Letters of Oscar Wilde*. London: Butler, 1962.
- Hart-Davis, Rupert. ed. *More Letters of Oscar Wilde*. London: Bath, 1986.
- Kermode, Frank. *Romantic Image*. London: Routledge, 1957.
- Keats, John. "Ode on a Grecian Urn." *The Poetical Works and Other Writing of John Keats., Vol.3*. Ed. Buxton Forman. New York: Phaeton Press, 1970.
- Raby, Peter. ed. *The Cambridge Companion to Oscar Wilde*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- Townsend, Dabney. *An Introduction to Aesthetics*. Malden: Blackwell, 1997.
- Wilde, Oscar. ---. *The Collected Works of Oscar Wilde*. Hertfordshire: Wordsworth, 2007.

(もり あやか／英米文学)